

巻頭言

「もしかすると、この時のためであるかもしれない。」

～個性を引き出す～



21世紀のエステル会 顧問 ひのおきお 樋野興夫

(一般社団法人がん哲学外来理事長・順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授)

「21世紀のエステル会」のモットー：

「他人の必要に共感すること」であり、「他の人々に注意を向ける」ことである。

「21世紀のエステル会」の3箇条：

- (1) 「役割意識&使命感」
- (2) 「実例と実行」
- (3) 「行いの美しい人」

である。

筆者の生涯に強い印象を与えたひとつの言葉がある。「もしかすると、この時のためであるかもしれない。」(旧約聖書 エステル記 4章 14節)である。南原繁は、「何かをなす (to do) の前に何かである (to be) ということをまず考えよということが (新渡戸稲造) 先生の一番大事な教えであったと思います」と語り、また「明治、大正、昭和を通じて、これほど深い教養を持った先生はなかったと言っている」と語っている。

すべての始まりは「人材」である。行動への意識の根源と原動力をもち、「走るべき行程」と「見据える勇気」、そして世界の動向を見極めつつ、高らかに理念を語る「21世紀のエステル」出でよ！『教養ある人間とは、「自分のあらゆる行動に普遍性の烙印を押すこと」であり、「自己の特殊性を放棄して普遍的な原則に従って行為する人間」のことである。それは人間の直接的な衝動や熱情によって行動する代りに、つねに理論的な態度をとるように訓練されることである。』(南原繁著作集第3巻より)。

「責務を希望の後に廻さない、愛の生みたる不屈の気性」が「人生の扇の要」の如く甦る。「ビジョン」は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々である。「目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし」(新渡戸稲造)の教訓が今に生きる。

「21世紀のエステル会」の役割は、「利己的な happy より、利他的な joyful」の普及であろう。



発足の経緯

樋野興夫先生を顧問に、3つのメディカルカフェで代表を務める金田佐久子（川口がん哲学カフェいずみ）、太田和歌子（がん哲学外来白鷺メディカルカフェ）、田鎖夕衣子（がん哲学外来メディカルカフェひばりが丘）の3人をメンバーとして発足しました。

2018年5月5日（土）のこと、メディカルカフェひばりが丘の開設2周年記念講演会後のスタッフ交流会の席で、講師の樋野興夫先生を前に、白鷺カフェ代表の太田さんと田鎖で、「お互いのカフェを行き来はしても、じっくり課題や悩みを語り合うことってないよね」「じっくり話す場がないとね」。そんな会話に、樋野先生が「メディカルカフェをしている白鷺教会とひばりが丘教会と西川口教会で、合同シンポジウムを企画したらいいのではないか」と提案してくださって、生まれたのです。

カフェ代表の3人は、それぞれ違う教会に属しており、月刊誌『信徒の友』の樋野興夫先生の記事をきっかけに、がん哲学外来とメディカルカフェを知り、教会を会場にしてメディカルカフェを開設しました。白鷺メディカルカフェは2015年から、ひばりが丘は2016年から、いずみは2017年から運営しています。

それぞれの教会にかけがえのない出会いがあり、がん患者・家族の方々を迎える場の必要を感じて、カフェ開設に導かれました。カフェの立ち上げにあたって、ひばりが丘は白鷺に、いずみはひばりが丘のカフェに参加した他、先行するいくつものメディカルカフェに参加しながら、さまざまな運営の仕方を参考にして、一定の準備の時を経て開設したカフェです。

とくに、『信徒の友』2015年11月号では、白鷺メディカルカフェを始めた中井理佐子さんの記事が掲載されて、どんなふう教会のカフェを立ち上げたかが、丁寧に紹介されていたので、大変参考になりました。樋野先生の著書を読みつつ、周囲の既存のカフェに参加し、先輩方のアドバイスを伺いながら、少しずつ吸収したことを元に、自分たちに合ったスタイルで運営しています。それぞれ違った個性がある3つのカフェと21世紀のエステル会を、どうぞよろしく願いいたします。

活動内容

まずは9月のシンポジウムを開催することと、ニュースレターの発行、ホームページでのブログによる発信を続けることです。ここから、他のカフェの皆さんや、これからカフェを始めたいという方がたと出会い、個別のカフェの経験や課題を、お互いにわかち合いながら進みたいと考えています。

また、日頃のカフェ運営だけでなく、がん哲学外来に関する講座や研修会、講演会に参加したら、その情報も共有できると良いと考えています。出会いと学びを重ね合い、厚みのある「空っぽの器」になりたいと願っています。

会の名称について

「21世紀のエステル会」という名称は、旧約聖書にある、民族を迫害の危機から救った女性エステルの物語の一節をキーワードにして決まりました。これは、エステルが英雄で偉大な人物だから、ということではありません。無名で力もない一人の女性が、歴史に残る大事な役割を担うことがある、という意味で受け止めています。きっと、身近にまだまだエステルがいることと信じています。

21世紀のエステル会◆メンバー紹介

◆代表・^{かねださくこ}金田佐久子（川口がん哲学カフェいずみ 代表）

わたしががん哲学外来メディカルカフェを始めようと思ったきっかけは、約4年前、「信徒の友」の連載記事によって「がん哲学外来」を知ったことでした。がんと闘った友、また今も闘病中の教会の仲間がいます。わたしは教会の牧師として、がんの治療ばかりではない悩み（仕事、生活、人間関係など）を聞いていました。それを話すだけでも、人は心が少し軽くなるのです。そんな苦しみに耐えている人は地域にたくさんいるはずですし、その方々皆が礼拝に来るわけではありません。がん哲学カフェがそのような方たちの居場所の一つになればいいと思いました。

2017年3月の第1回のカフェから、この7月で11回を数えました。カフェ開設の前に、他のカフェに参加していろいろ知恵と励ましをいただきました。互いに知ることで、気づきが与えられ、共に豊かにされます。21世紀のエステル会が、そのような豊かな出会いの広場となれたらうれしいです。どうぞよろしくお願いいたします。

◆企画部長・^{おおたわかこ}太田和歌子（がん哲学外来白鷺メディカルカフェ 代表）

がん哲学外来白鷺メディカルカフェは、妹 中井理佐子が始めたカフェです。私達が子どもの頃から通っていた日本キリスト教団白鷺教会で、毎年行う伝道礼拝の講師として樋野興夫先生をお招きしたことがきっかけで、妹が代表となって立ち上げました。妹は29歳の時に乳がんを発症。以来手術、放射線治療、抗がん剤と一通りの治療を受け、再発も2回ありました。妹が2016年8月に天国に旅立った後は私が引き継いでおります。立ち上げ、運営を一緒にやっていたとはいえ、引き継いだ私は知っていたようで知らないことがたくさんありました。妹が立ち上げのアドバイスをしたひばりが丘教会の田鎖さんに、今は私が相談に乗ってもらっています。自宅から近いメディカルカフェひばりが丘にお邪魔し、お互いに情報交換をしながら、「がん哲学外来白鷺メディカルカフェ」という妹からのバトンをしっかり握って、これからも一步一步歩んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

◆広報部長・^{たぐさりゆいこ}田鎖夕衣子（がん哲学外来メディカルカフェひばりが丘 代表）

「信徒の友」の連載でがん哲学外来を知り、2015年7月に教会で樋野先生の講演会の企画を担当しました。がんであっても明るく生き生きと「この教会でもカフェを始めるのですか？」と尋ねられた秋山美奈子さんと角田万木さんに背中を押され、カフェ開設に踏み出しました。25年前に乳がんを経験した母も「がんと診断されて不安で一杯の人が、がんを経験した人と話すことは大きな希望と慰めになるのよ。カフェを始めよう」と言いました。その頃、ちょうどカフェをスタートしたばかりの白鷺メディカルカフェ代表の中井理佐子さんには、とくに懇切丁寧なアドバイスをいただき、2016年5月にカフェを始めました。理佐子さん、そして美奈子さんが天国へ旅立った後、白鷺カフェを引き継ぐ太田和歌子さんとはほぼ毎回、お互いのカフェを行き来しています。一人ひとりの祈りと期待が一つになって実現したメディカルカフェ。21世紀のエステル会を通して、個々のカフェの課題や実践を共有し、知恵と経験を生かし合えたらと願っています。よろしくお願いいたします。



6月30日 がん哲学外来ナース部会シンポジウム会場にて。パネリストを務めた太田さん、お疲れ様！
右から 太田和歌子、金田佐久子、田鎖夕衣子